

おとたちばなひめ

弟橘媛のくし (緒川)

やまとたけるのみこと

倭建命は、幼名を小碓命といい、景行

てんのう だい おうじ

天皇の第三皇子です。あるとき、兄大碓命を

つかみ殺してしまい、父からそのあまりにも

ちち

荒々しい気性を恐れられ、西方の賊、熊曾建

あらあら

きしよう

おそ

せいほう

ぞく くまそ たける

きようだい

せいばつ

おうすのみこと

とほ

きゆしゅう

兄弟の征伐にやられました。

髪を結び、成人

かみ ゆ

せいじん

の式を挙げた小碓命は、遠く九州まで出かけ

しき あ

おうすのみこと

とほ きゆしゅう

て行って二人を討ち、「倭建命」の名をもら

い ふたり

やまとたけるのみこと

な

って帰ります。すると、天皇は、ただちに東方十

かえ

てんのう

とうほう

二道の平定を命ぜられました。

倭建命は、

二道の平定を命ぜられました。

倭建命は、

やまとたけるのみこと

やまとたけるのみこと

「天皇は、わたしに死ねといわれるのか。」

と、なげき悲しみながらも、伊勢神宮にお参り

して、おばの倭媛命から草那芸剣と火打ち

いし はい

ふくろ

石の入った袋をもらって東国に向けて出征し

ます。

それから、倭建命は、東国の賊と戦いな

がら各地を回りました。ある時、一行が駿河国

やいづ

焼津にさしかかったとき、あたり一面枯野原の

なか ひせ

中で火攻めにあいました。もうこれまでかと思

われたとき、命は、草那芸剣を抜いて近くの

枯草を刈り取り、火打ち石で火をつけて逆に敵

かれくさ か と ひう いし ひ

ぎやく てき

を焼き滅ぼしました。



ところが、一難去ってまた一難、今度は、命の乗った船が浦賀水道を航行中、突然嵐が起こって海が荒れ、いまにも船がてんぷくしそうになりました。すると、いっしょに乗っていたお後の弟橘媛が、

「わたくしが御子にかわって海に入りましょう。御子は、はやくご自分のお仕事をお済ませになつて、天皇にご報告なさいませ。」

とおっしゃって、菅で編んだ敷物八枚と皮で作った敷物八枚、絹の敷物八枚を波の上に敷き、その上に座って次のような歌をよまれました。

さねさし相武さがむの小野おぬに燃ゆる火もの火中ひ ほなか

にたちて問とひし君きみはも

(相模さがみの野のに燃もえ盛さかる火ひの中なかに立たって、

私わたしの安否あんびを心配しんぱいしてくださったあな

たよ。)

すると、不思議ふしぎにも、自然しぜんに波なみはおさまり、倭やまと

建たけるのみこと命のの乗ふねった船ふねは、楽らくに進すすみはじめました。

それから後のちに、愛あいする夫おつとのために身代みがわりと

なじゆすいって入水おとたちはなひめした弟おと橘たちばな媛ひめのくしが、緒川おがわの海岸かいがん

に打うち寄よせられました。そのくしを納おさめて建たて

られたのが、今いまの入海いりみじんじゃ神社じんじゃだということことです。

